日本古代学の国際化のために

――ジョーン＝ピジョー編集 *Capital and Countryside in Japan, 300-1180* の刊行に寄せて――

佐々木　憲一

はじめに

本稿は、南カリフォルニア大学日本史学担当ゴードン＝L＝マクドナルド記念栄誉教授のジョーン＝ピジョーJoan R. Piggott[1]氏が編集した *Capital and Countryside in Japan, 300-1180* を解説・紹介し、日本における古代学研究の国際化の重要性を指摘するものである。本稿で「古代学」というとき、弥生～平安時代を対象とする考古学と文献史学を統合する分野の名称として用いたい。この時代は日本において国家が形成され、成熟してゆくという、歴史上画期となった時期であり、欧米の国家論研究に日本人による研究が本来大きな貢献を為し得るはずである。しかし現実は、欧米において日本における古代学や国家論・国家形成論研究の存在はあまり認識されていない。私は高校、大学、大学院と一二年間、アメリカ合衆国で教育を受け、地域間交流の視点から古墳時代開始のプロセスをテーマに英文で博士論文をまとめた経験があり[2]、この現状を常に憂えてきた[3]。そういった現実を打破する第一歩として、本書が刊行されたのである。その意義は限りなく大きい。本書のタイトルをわかり易く和訳すると、『古墳～平安時代における中央と地方』となろうか。「英語で解説・紹介する日本人歴史学者 Japanese Historians Interpreted in English」という副題が付く。編者ピジョー氏の前任校であるコーネル大学より、コーネル東アジアシリーズの一二九巻として二〇〇六年に出版された。

① ピジョー氏は女性である。特に区別するのは、日本人にとって英語の名前のみに基づいて性別を判断するのが極めて困難だからである。実際、私のアメリカ合衆国留学時代、女性研究者が「日本人研究者か

ら Mr.で手紙が届く」と苦笑していた。

② 佐々木憲一 1995 *Regional Interaction and the Development of Social Complexity*. Ph.D. Dissertation, Dept. of Anthropology, Harvard University.

③ 佐々木憲一 一九九三「日本考古学の国際化のために」『考古学雑誌』第七八巻、三七七―三九一頁、一九九六「日本考古学の国際化のために」『月刊文化財発掘出土情報』八月号、巻頭

英語圏における日本古代学の立場

まず、本書出版の意義の大きさを日本人読者に理解していただくために、英語圏における日本古代学理解不足の実例を幾つか紹介したい。現在マサチューセッツ工科大学教授のジョン＝ダワー John W. Dower 氏が一九八六年にまとめた *Japanese History and Culture from Ancient to Modern Times: Seven Basic Bibliographies* (Markus Wiener Publishing, New York)（総一三二頁）は、英文の単行本は勿論、学術雑誌掲載の論文を中心に日本史関係の文献を網羅するが、そのなかで、奈良時代以前の文献のリストは九～一四ページの計五ページに過ぎない。この文献目録刊行後既に二〇年経つが、この傾向は現在でも変わらない。

さらに悲劇的なのは、英語圏、特にアメリカ合衆国の研究者のなかに、英語以外の言語で活字になった業績を認めようとしない人がいることである。私が近藤義郎氏の『前方後円墳の時代』に深い感銘を受け、出版後間もない一九八三年にミシガン大学の院生に対しその内容の凄さ、社会科学への貢献を英語で説明したとき、「英語で書かれていないので、そのような業績は認めない。」と斬って捨てられたのは、未だに悲しい思い出である。こういう傲慢な態度の研究者から見れば、英語の文献が少ない、イコール研究がされていない、ということになる。ただ敢えて彼らの立場に理解を示すと、第二次世界大戦以降一九五〇年代まで、日本語ができなくとも日本研究を実践できた時代があったことも事実である。例えば名著『菊と刀』の著者ルース＝ベネディクト Ruth Benedict の専門はアメリカ合衆国先住民プエブロ族の民族学であった。

そういった学問的環境のほかに、日本語を母国語としない日本研究者にとっては、日本語が難しいという大きな現実がある。これは、アメリカ合衆国で一二年間教育を受けた私にとっても未だに英語が難しい言語であるのとまったく同じである。例えば、昨年 *State Formation in Japan: Emergence of a Fourth-Century Ruling Elite* (Routledge) を公刊されたジナ＝バーンズ Gina L. Barnes 氏も、かつては日本語読解に相当苦労されたことが明白である。というのは、一九八〇年代に氏が発表した日本考古学に関する多

くの英文論考は、日本人考古学者による見解の誤解、誤読に基づいているものが多く、同時に日本人考古学者による貢献がなぜかほとんど言及されることもなかった。一九九〇年に帰国して日本での研究生活を開始して後、バーンズ氏自身によるこのテーマの先行研究 *Protohistoric Yamato*（一九八七）を再読したところ、日本での当該テーマに関する研究レヴェル・成果とあまりにかけ離れている現実に愕然とした。日本の優れた研究成果を不当に貶めているのではないかと当時は怒りさえ覚えたくらいである。しかし今思うと、これは彼女の語学力不足からきたもので、彼女にはまったく悪意がなかったことが前述の *State Formation in Japan* からは読みとれる。日本人研究者の見解に対する氏の理解がこの二〇年間で大きく進んでいるからである。やはり日本語は難しいのだ。

確かに本書のような英書が一九八〇年代など早い時期に刊行されておれば、日本古代学の国際化はもっと進んでいたことは間違いないし、バーンズ氏の一九八〇年代における日本考古学への誤解なども生まれなかったであろう。しかし、兎にも角にも、類書が何もないところに本書が刊行されたわけで、その出版の意義は計り知れなく大きいのである。

Capital and Countryside in Japan, 300-1180 の概要

さて本書は、編者ピジョー氏による序論以下、日本人による一四本の論考の英語版で構成されている。英訳とせず、英語「版」と私が表現するのは、これらは、日本語のもとの論文の段落構成や文章の順序にとらわれない、思い切った意訳であり、英文でも translated ではなく、interpreted と表現されているからである。例えば、以下の採録論考の日本語タイトルと英文タイトルの違いを見れば、その方針は明らかである。これは編者が序論で説明するように、英語圏の読者にもとの論文の内容をわかり易くするための配慮であり、ピジョー氏の英断に賛辞を送りたい。また個々の英語版に先立ち、意訳を担当した研究者による適切な解説が附されている。解説には、もとの日本語論文の背景となった日本における関連研究なども紹介されており、内容が極めて充実している。採録された論考の中には出版から時間が経っているものもあるが、その後の研究が紹介され、また学史的意義も説明されている。

採録されたもとの日本語論文は次の通りである。（ ）内には英文タイトルと、コロンを挟んで解説・意訳紹介を担当した研究者名をあげる。

1. 都出比呂志　一九九一「日本古代の国家形成論序説――前方後円墳体制の提唱――」『日本史研究』三四三号（Early State Formation in Japan: Walter Edwards天理大学教授）
2. 小林行雄　一九六一「同笵鏡考」『古墳時代の研究』青木書店（Treatise on Duplicate Mirrors: Walter Edwards）
3. 原秀三郎　一九八六「地域と王権」『古代を考える』四一号（特集：磐田原古墳群の検討）（Suruga and Totomi in the Kofun Age: 編者）
4. 井上辰雄　一九八九『常陸国風土記に見る古代』学生社（The *Hitachi Fudoki* and the Fujiwara: 青木道子［故人　ボストンにあるClark大学教授だった］）
5. 高橋富雄　一九六二「古代国家と辺境」『岩波講座日本歴史』第三巻（古代　三）（The Classical Polity and its Frontier: Karl Friday アメリカ合衆国 University of Georgia 教授　古代・中世軍事史）
6. 武田佐知子　一九八九「古代における道と国家」『ヒストリア』一二五号（Roads in the Tenno-centered Polity: 編者）
7. 保立道久　一九七八「律令制支配と都市農村関係」『歴史学研究』（別冊）（Traffic between Capital and Countryside in *Ritsuryo* Japan: Janet R. Goodwin［ロサンジェルス在住フリーランス研究者］・Gustav Heldt アメリカ合衆国 University of Virginia 教授）
8. 森田悌　一九九一「摂関政治への道」笹山晴夫（編）『古代を考える　平安の都』吉川弘文館（Toward Regency Leadership at Court: 編者）
9. 佐々木宗雄　一九九四『日本王朝国家論』名著出版（序論と結論を抜粋）（The Court-centered Polity: 編者）
10. 戸田芳実　一九七六「王朝、都市と荘園体制」『岩波講座日本歴史』第四巻（古代　四）（Kyoto and the Estate System in the Heian Period: Janet R. Goodwin）
11. 宮崎康充　一九七八「古代末期における美濃源氏の動向」『書陵部紀要』三〇号（The Mino Genji in the Late Classical Age: 編者）
12. 元木泰雄　一九九六『院政期政治史研究』思文閣出版（七章）（Kofukuji in the Late Heian Period: Mikael S. Adolphson カナダ University of Alberta 教授）
13. 石母田正　一九四六『中世的世界の形成』伊藤書店（Japan's Medieval World: 編者）
14. 小山靖憲　一九七六「古代末期の東国と西国」『岩波講座日本歴史』第四巻（古代　四）（East and West in the Late Clas-

sical Age: Bruce L. Batten 桜美林大学教授）

私は考古学が専門なので、文献史学におけるこれら諸論考の選択がどの程度妥当か議論できない。文献史の素人から見れば、『岩波講座日本歴史』所収の総論的な論文や、ヴィジョンの大きい論考が取り上げられているという印象を受けるので、日本古代史がマイナーな分野である英語圏向けとしては適切ではないかと感じる。ただ、選択した編者や解説を担当した研究者は日本語が母国語でないため、日本人研究者ほど多数の日本語論文を恒常的に読破しているわけではない。したがって、もしかしたら、同様のテーマで別の論考を選択したほうがよかったという可能性を完全には否定しきれない。本書の作成に尽力した彼らに悪気は一切ないので、そういった場合は、編者に知らせてあげるのがよいであろう。また日本人読者に予めご理解いただきたいのは、たとえ日本の研究の枠組みの中ではあまり代表的と見なされない研究でも、海外の研究者にとって非常に魅力的な研究成果と映り、そのため日本の学界の主流では必ずしもない研究が、欧米では日本の学界を代表するような研究として取り上げられることがある。日本考古学の分野では、環境考古学・動物考古学・古民族植物学の研究成果が、日本より海外での評価が高いのである。

本書の評価

以上一四章のうち私が精読したのは最初の一～三章と各章の解説だけであるので、本書の英文解釈の出来栄えなどの評価は、これらの章に限られることを予めお断りしておきたい。編者による序論は、まず本書企画の意図と背景から始まり、日本人による研究成果の英語圏への紹介の難しさに触れ、本書採録の諸論考が直訳でないことを説明する。さらに、採録論文の意義の簡単な解説に先立ち、古墳～平安時代を対象とした数少ない英語圏での業績六本を紹介する。これは、研究の枠組みが全然違う日本人の業績をいきなり紹介するよりも、英語圏・ヨーロッパ文化圏で大学教育を受けた研究者による研究のほうが、英語圏の読者にとっては理解しやすいという編者の配慮である。取り上げられたのは、Gina Barnes 著 *Protohistoric Yamato* (University of Michigan Museum of Anthropology, Anthropological Papers No. 78, 1988)、Joan Piggott 著 *Emergence of Japanese Kingship* (Stanford University Press, 1997)、Bruce Batten 著 *State and Frontier in Early Japan*（スタンフォード大学大学院提出の博士学位請求論文1989）、Cornelius Kiley 著 "Estate and Property in the Late Heian Period" (J. W. Hall, J. P. Mass 共編 *Medieval Japan*, Yale University Press,

1974)、Thomas Keirstead 著 *Geography of Power in Medieval Japan* (Princeton University Press, 1992)、Mikael Adolphson 著 *Gates of Power: Monks, Courtiers and Warriors in Pre-modern Japan* (University of Hawaii Press, 2000)、以上六件である。

日本人研究者にとっては、このような関連文献が英語で公表されており、その内容を簡単に知る、よい手がかりとなる。バーンズ氏の *Protohistoric Yamato* は、冒頭で記したように問題が多い文献であるが、より評価に値する *State Formation in Japan*（二〇〇七）が本書の準備段階ではまだ公刊されていないので、旧作を取り上げるのは止むを得ないのであろう。また逆に、英語圏では数少ない日本古代史の専門家であるウェイン＝ファリス William Wayne Farris 氏の業績がここでなぜ取り上げられないのか、やや疑問である。ファリス氏の *Population, Disease and Land in Early Japan, 645-900* (Harvard University Press, 1985)は、本書採録の諸論考と関連が薄いにしろ、*Heavenly Warriors: The Evolution of Japan's Military, 500-1300* (Harvard East Asia Monographs, 1998) の第一章は、都出論文と関連がなくもない。英語圏の読者にとってはファリス氏の業績は常識で、ことさら取り上げる必要がないのかも知れないが、ピジョー氏編集の本書は今後日本でも活用される可能性が十分あり、日本人研究者に対する多少の親切は欲しかった。

第一章、都出比呂志 Early State Formation in Japan はウォルター＝エドワーズ Walter Edwards 天理大学教授による意訳、解説による。エドワーズ氏の母国語は勿論英語で、日本民族学をテーマにコーネル大学で博士号を取得した研究者であり、日本語読解力は昨今の平均的な日本人学生以上である。都出のもとの日本語論文は論旨明確であり、比較的訳出しやすかったと推測するが、それでも、適確な、すばらしい意訳である。この章を通して、石母田正、原秀三郎、鬼頭清明、吉田晶、近藤義郎、門脇禎二の国家論・国家形成論の一端が英語圏に初めて紹介されるのも嬉しい。エドワーズ氏は英語圏の読者の理解を助けるため、もとの都出論文にはなかった図も足していることも賞賛に値する。ただ、都出が言及する遺跡、地域の位置を白地図に示して欲しかった。

次の章は小林行雄の Treatise on Duplicate Mirrors で、エドワーズ氏の十二分な解説と意訳による。エドワーズ氏は『天理大学学報』第一七八輯（一九九五）に本章の草稿を発表していた。小林の日本語は日本文化の枠組みの中では美文と評価されるのかもしれないが、英語圏で大学教育を受けた私にとっては非常に理解困難な文章であった。したがってエドワーズ氏の苦労は、想像を絶するものがあったと確信する。重複部分は削り、小林がお茶

を濁す部分は明確化し、さらに、海外の読者にわかり易い図を本書のために新たに起こしている。小林行雄自身による同笵鏡分有関係の図を私がハーヴァード大学の大学院演習で見せたときは、私が英語で一生懸命説明したにもかかわらずterrible illustration!と酷評された。しかしエドワーズ氏が今回作成した図は英語圏での理解にたえるものと思う。小林行雄の同笵鏡論と前方後円墳の築造規格論は、私がアメリカ考古学会の総会で一九九八年三月に紹介したため、英語圏の研究者の関心を呼び、考古学の英文概説書でも言及されるようになった①。その同笵鏡論の英語版がついに英語圏で活字になったわけで、海外での国家形成論研究にも大きな貢献となろう。『天理大学学報』は、欧米の国家論研究者の目にはなかなか届かないであろうし、なんといっても一九九五年の草稿の図は、小林の図をそのまま英訳したもので、恐らく英語圏では理解困難と推測する。エドワーズ氏の解説は親切を極めており、一九七〇年代以降の三角縁神獣鏡研究の蓄積も十分反映させている。また「三角縁」の意味も、鏡の断面図とともに初めて英語で活字になった。

第三章、原秀三郎のSuruga and Totomi in the Kofun Ageは編者ビジョー氏自身の意訳・解説による。編者はこの作業に先立ち、この論文の素材となった静岡県磐田原古墳群と和田岡古墳群を原氏の案内で一日かけて見学しており、その慎重かつ積極的な姿勢に敬服する。私自身、訪れたことのない遺跡の調査報告書の英文要旨を作成するのは困難を伴うものである。おかげで大変わかり易い英文に仕上がっている。ただ、エドワーズ氏の意訳に比べると、やや直訳に近いところがある。特に、もとの原稿は「古代を考える会」での原氏の講演を活字化したもので、日本語でも普通の論文とは違ったスタイルの文章だった。したがって意訳にあたっては、英語論文では贅肉と認識されるような部分をもっと思い切って削除してもよかったのではと感じる。それでも原氏の貢献を低くするものでは全然ない。ただ大変惜しむらくは、原氏が多忙であるためか、翻訳上の間違いが直されることなく活字に残ってしまったことである。武蔵北部は千葉県ではなく埼玉県、埼玉稲荷山古墳のよみは「さきたまいなりやま」である。

本書を通して、日本語の長母音と短母音を区別しているのは、わかり易い。欲を言えば、日本の地名、歴史的人名、研究者名は巻末の文献目録と索引のところで漢字を入れておいた方が海外の日本研究者には役立ったであろう。その巻末には、史料の解説と日本史用語の解説が漢字とともに英語で附されている。英語圏の読者の便を図るためだが、日本人研究者も自分の日本語論文の英文要旨を執筆するときは是非活用して欲しい。史料の英訳タイト

ルは、本書の英訳が標準であるため、それに従う必要があるからである。また文献目録も大変充実しており、本文中で日本人研究者が引用した文献は勿論のこと、解説の部分で引用された日本語・英語文献も網羅されている。日本人研究者にとっては、どのような関連文献が英語で活字になっているか、知る手がかりとなる。

① BOGUCKI, Peter 1999 *The Origins of Human Society*. Blackwell. 三八六頁

展　望——日本古代学の国際化のために

本書は基本的に、英語圏における日本古代学研究を活発化させるために刊行された。同時に、日本に拠点をおく若手日本人研究者にとってもいろいろな側面でその意義は大きい。前述の通り、日本語論文に付載する英文要旨作成には本書は欠かせない。特に、日本人作成の英文要旨は無意味なものが大変多く、日本語力が十分でない海外の若手研究者が日本古代・中世史に関心を抱くことの妨げになっている。これを機に日本人研究者には、英語圏の読者にわかり易い英文要旨作成のため、本書の英文を参考にしてもらいたい。

次に、日本史専攻の学生は英書購読を不得手とする人が少なくない。本書採録の英文論文は、すべて日本語で内容がすでに知られているものばかりである。内容がわかっている英文は、英語力が不十分でも理解しやすい。また日本語のどのような表現を英語でどのように表現するのか、いい勉強になる。日本史専攻の大学一、二年生向け英書購読のテキストとして本書は理想である。特に、本書の原稿を執筆した研究者はみな、簡にして要を得た英語の文章を書く人ばかりであり、我々の英語の文章力向上にも役立つ。

また本書を通して、日本人研究者には、翻訳とはどういう学問的作業かも認識を深めて頂きたい。本稿のタイトルを「日本古代学の国際化のために」と大上段に構えた理由はここにある。私が考古学の学術雑誌の英文要旨作成を任されていたとき、論旨明確なわかり易い英文を常に心がけていた。非常に悲しかったのは、論旨を不明確にしたいという原著者の真意を曲げる行為だ、と読者からご批判を頂いたことである。この批判は果たして妥当だろうか。例えば、小林行雄同笵鏡論をエドワーズ氏が直訳して、わけのわからない英文で活字にしたら、海外の研究者たちは、国家形成過程理解のための小林行雄による大きな貢献を理解できないばかりか、彼らは「論理的な文章を書くことができない」小林を研究者として認めないであろう。わかり易い英文に書き直し、そ

の業績の学問的貢献を理解してもらうように務めるのか、あるいは「原著者の真意を尊重」した意味不明の英文を仕上げ、原著者の優れた学問的貢献が無視されるようにするのか、選択肢は明白であろう。本書は、日本人研究者による優れた業績を如何に英語圏で理解してもらうのか、その模範を示したもので、その貢献は言葉で尽くせないほど大きい。

最後に、この論文集は「単に始まり」であり、日本人研究者による原始・古代に関する業績が英語で読めるようなることを期待する、と編者自身が序論で述べている。したがって、この続編を期待しつつ、本書の改善の余地、つまり続編はどうあるべきか提言したい。そのひとつは、本書の古墳時代と国家形成論を対象とした論考の選択である。都出氏と小林氏の論文は古墳時代史全体、古墳時代前期の政治構造に迫る大きなヴィジョンの論考である。それに対して原氏の論文は、確かに考古資料と文献史料の統合解釈に成功した好論であるが、やはり原氏による「日本古代国家史研究の理論的前提①」のような理論研究を採録した方が海外の研究者にとっては大きな刺激になったのではないだろうか。

ただ原氏の教示によれば、ピジョー氏は、イェール大学で永く日本史を講じたJohn W. Hall教授の地域研究を高く評価しているので、古墳時代を対象とした地域研究を取り上げたかったようである。その場合、考古学者による考古資料の優れた分析に基づくレヴェルの高い地域研究は数多く活字になっているので、そういった業績も紹介してほしい。例えば、浜松市教育委員会の鈴木一有氏は、遠江東部の古墳時代後期は横穴墓に埋葬された豪族の社会的地位が、墳丘を伴う古墳に埋葬された豪族の社会的地位より高かった可能性を指摘している②。海外の研究者にも興味深いこの種の論考は、古墳時代研究では枚挙に暇がない。これはピジョー氏の専門が文献史学で、考古学・人類学の理論研究や個別研究に弱いことからくるのかも知れない。

さらに、ピジョー氏が石母田正の『中世的世界の形成』を始めて英語で紹介した功績は極めて大きいが、できれば『日本の古代国家』の抜粋も本書に含めてほしかった。この続編には是非、石母田正、吉田晶、原秀三郎、近藤義郎らの国家論・国家形成論を並べていただき、日本における国家論、国家形成論が一九六〇年代以来世界水準にあり、欧米における議論に十二分に貢献できることを示すよう切に望むものである。

結論として、本書は今後の日本古代学の国際化の基盤を成す重要な業績である。本書を企画し、困難な作業を完成させた編者ピジョー氏は勿論のこと、優れた解説・意訳を準備された執筆陣にも心から敬意を表したい。強いて言えば、本来これは日本人研究

者がイニシアチブを執るべき企画であった。日本では翻訳が業績として評価されないばかりか、私が指摘したように、翻訳という学問的作業に対する理解も非常に低い現実が国際化の障壁として立ちはだかっている。そのような障壁が少しでも低くなることを祈ると同時に、日本人研究者による国際化に向けた主体的努力を心から期待する。

① 『日本古代国家史研究』東京大学出版会　一九八〇　所収

② 鈴木一有　二〇〇一「東海地方における後期古墳の特質」『東海の後期古墳を考える』第八回東海考古学フォーラム三河大会

（明治大学文学部准教授）